

加茂谷①

地名の由来となった神社

芦田川北部の平野から北にのびる谷
一帯を加茂谷と呼ぶことがあります。
この辺りは京都下鴨神社の荘園として
平安時代から室町時代まで存続した、
勝田庄かつたのしょうが置かれた地として知られて
います。加茂谷には古くからの遺跡・史
跡が数多くありますが、今回は「加茂」
という地名の由来となったといわれる、



賀茂神社の境内

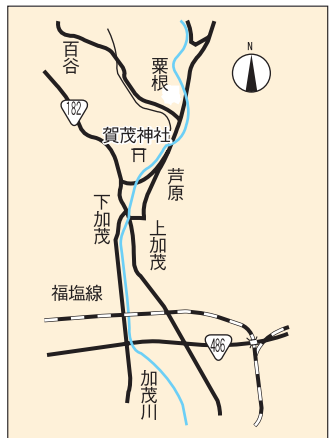
芦原の賀茂神社について紹介します。

昔からこの谷の文化は、谷の中央に
あるこの神社を中心に発展してきたと
いわれています。戦前までは加茂の大
宮と呼ばれ、近郷の崇敬を受けていま
した。神社の背後にそびえる加茂山、
前を流れる加茂川をはじめ、その流域
には貴船・高尾山・上加茂・下加茂な
ど京都との関連をうかがわせる地名が
残っています。

正面の鳥居をくぐると隨身門、その
奥に拝殿があり、神殿は2棟あって向
かって右側に別雷神社わかいかづち、左側に八幡
社まつかが祀まつってあります。社伝によれば貞
観6年（864年）、京都上賀茂神社



別雷神を勧請したといわれる船形の石



の別雷神をこの地にあった船形の石に
勧請したのがこの神社の起こりといわ
れ、現在は霊石として本殿の北側に祀
られています。さらに境内には樹齢約
450年といわれる市天然記念物のケ
ヤキの巨木があり、神社の歴史を物
語っています。

また祭神にちなんで、昔から雷よけ
の神社として、近隣はもとより遠方か
らもたくさん参拝があったといわれ
ています。今でも夏には「ドンドロよ
けの祭り」と呼ばれる雷よけの湯釜神
事が行われています。

(2003年2月号に掲載)

加茂谷② 加茂谷の常夜燈

加茂谷の旧街道には、石造の常夜燈が数多く見られます。これらは香川県琴平町の象頭山に祀^{まつ}られていた金刀比羅宮の礼拝所として建てられたものです。それぞれ「金毘羅宮」や「象頭山」、「象山」などの文字が刻み込まれています。一般的には航海など海の安全を守る神として祀りますが、ここでは五穀^{ほうじょう}豊穰を祈る農業の神として祀っています。これらの常夜燈は「こんびらさん」と呼ばれ、今でも10月10日に住民が集まり、祭礼後に供物で接待して



「象頭山」の銘(下組クラブの上⑥)

いる所があります。また街道沿いにあることから、旅人たちの安全や地域の発展を祈った民間信仰の対象であったとも考えられます。

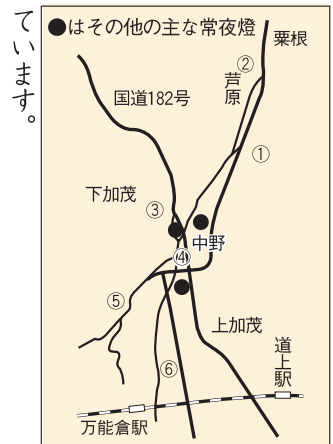
加茂谷の「こんびらさん」は芦原公会堂前①にあるものが一番古く、文化13年(1816年)のものです。それから約40年の間に、下郷地妙永寺下②、百谷大岩橋(下加茂上組)③、旧東城街道上り口④、中組旧役場横⑤、下組クラブの上⑥など地域ごとに建てられ



中組旧役場横⑤



下郷地妙永寺下②



●はその他の主な常夜燈

このほかにも道端には地神さんや、辻堂などに安置されているお地藏さんなど、多くの神仏が祀られています。普段は見すごしがちなこのような神様や仏様は、長い間地域の移り変わりを見守ってきたことでしょう。

(2003年3月号に掲載)

大佐山白塚古墳と素蓋鳴神社 新市町戸手地区の遺跡

福塩線戸手駅で下車して左方向(西)へ歩き出します。左手は国道486号、右は山ろくが迫っています。この山ろくには、奈良時代に大宰府に通じた古代山陽道、江戸時代には石見の国(島根県)に至る石州道と呼ばれる道が西に向かっています。

数百m進むと戸手川にかかる小さな橋に出ます。右折して川沿いにさかのぼると、民家が尽きようとするあたり



大佐山白塚古墳

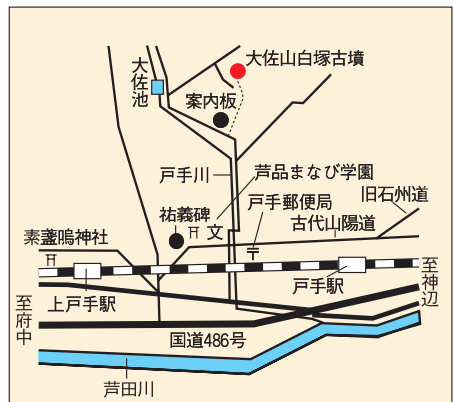
で、薬師堂と荒神社の境内が見えます。道端には「車直進1.6km 徒歩1.4km」と絵文字で書かれた大佐山白塚古墳の案内板があります。

大佐山白塚古墳は、一辺約12m、墳丘の高さ3.5m、形は方墳に近く、花こう岩の切石で築かれた横穴式石室です。大佐山は標高188mで、古墳は頂上から少し下った南斜面にあり、1948年県の史跡に指定されました。この周辺には、古墳が多く「古墳群」と呼ばれるにふさわしい所です。

良神社脇に「祐義碑」が建っています。1800年から38年の年月と私費



戸手の素蓋鳴神社



をもって、戸手用水を開削した記念碑です。戸手用水は福塩線に平行して東に流れています。開削後、南に広がっていた畑は水田に変わりました。

用水に沿って西に歩いていくと、素蓋鳴神社の高い杉木立が見えます。「備後国風土記」に書かれていた「茅の輪伝承」をもつ神社、というより祇園祭(通称けんか神輿)の方が有名なようです。境内にある、天満宮(旧本地堂)や相方城の城門を移築した簡素な四脚門などは、建築史上貴重な建物です。

(2003年4月号に掲載)

県史跡 相方城跡

大規模な中世の山城

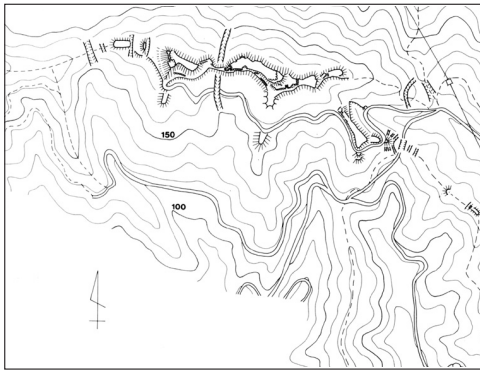
JR福塩線で福山駅から約30分、新市駅のホームに降り立つと、南側の険しい山の上に、いくつものテレビ塔が目に飛び込んできます。この山全体が相方城跡です。



相方城跡



南側の石垣



相方城跡略図

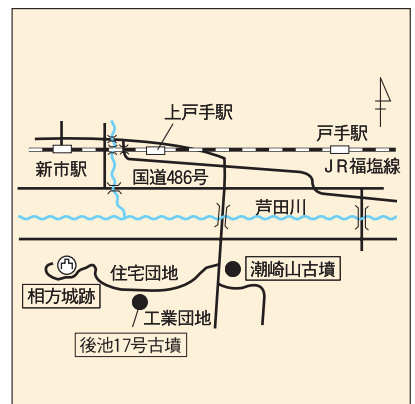
標高191mの通称「城山」の山頂を中心に、東西約1km、南北約500mの範囲に城郭の遺構が分布する大規模な山城として、山頂付近が1995年に県史跡に指定されました。芦田川を挟んで正面に見える亀寿山城（標高139m）を本拠地として備後南部に勢力をもっていた宮氏や、相方城より南の地域を本拠地としていた宮氏一族の有地氏などにより、16世紀前半には、大規模な中世山城として整備されていたことが発掘調査で確認されています。

天文21（1552）年に宮氏が滅んだ後は、有地氏が出雲国や備後国北部

などに毛利氏によって移動させられるまで、相方城を拠点に当地を支配していましたが、その後は毛利氏の直轄城となったようです。その間に東方への備えを目的とした近世城郭として、山頂部を総石垣とした大規模な整備が行われました。そして関ヶ原の戦い（1600年）による毛利氏の備後地域からの撤退によって相方城は廃城になったと考えられます。

山頂部分は、幅約30m・深さ約10mの空堀を挟んで東側曲輪群と西側曲輪群にわかれ、それぞれが独立した城郭として機能するようになっていました。

（2003年5月号に掲載）



神谷川遺跡周辺

新市の町並みを一望

福塩線「上戸手駅」の北側を西へ300m、右折して登って行くと旧保養センターの建物があり、玄関横に「県史跡 神谷川弥生式遺跡」の標柱が立っています。遺跡はここから北方向に広がっており、芦田川と神谷川の合流地点を見下ろす丘陵にあります。

1947年以来3回の調査で、縄文時代晩期の土器、弥生時代後期の土器、石器、住居跡などが見つかっています。弥生土器は「神谷川式」と名付けられるほど特徴的で、そろばん玉のように胴が鋭く張り出した形をしています。当時は南西に開いた谷を中心に集落が



富田久三郎胸像

形成されていたようです。

ここからグラウンド浴いに登ると、右手に備後緋の生みの親、富田久三郎の胸像が見えてきます。久三郎は、1828（文政11）年に今の芦田町有地に生まれました。絹織物の製法を木綿の末、井桁模様の木綿緋を開発し、伊予・久留米と並んで日本三大緋生産地の一つとしました。

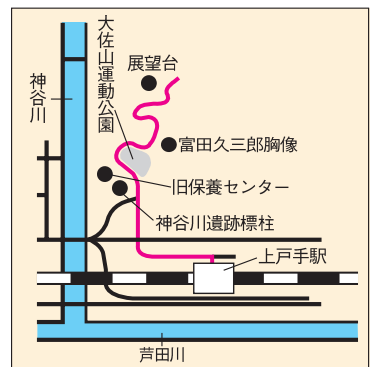
1960年前後に最盛期を迎え、全



神谷川遺跡遠景



神谷川遺跡標柱



国の緋の6割以上を生産していましたが、化学繊維製品の普及などにより需要は低下していきました。このような変化を久三郎は予測したのでしょうか。急な道を登りつづけると、やがて新市の町並みが一望できる山上の展望台に着きます。ここから、南西に相方城（さかた）の山城跡が見渡せ、標高差150mほどのウォーキングコースとして多くの人々に親しまれています。

（2003年7月号に掲載）

吉備津神社と宮内 県内最大の入母屋造

新市駅を下車して北方向に1kmほど歩くと、宮内に入ります。神社の強い影響力の範囲内にある地域を、宮内と呼ぶところは多いようです。

鳥居と隨身門ずいじんをくぐると大きなイチヨウの木のある広場に出ます。この広場では、中世から市場が開かれていました。



吉備津神社本殿

平安時代の国守が、年頭、最初に参る神社を「一宮いちのみやと呼びました。吉備津神社は備後の国の一宮となり、現在でも「一宮さん」と呼ばれ親しまれています。

この神社が造られたのは、601年、806年などいくつかの説があります。1148年、備後吉備津宮から白布、炭などを京都八坂神社に寄進した記録や、1229年に火災になったという記録が残されています。また、1287年に一遍上人が訪れたという記録が、「一遍上人絵伝」にも描かれています。

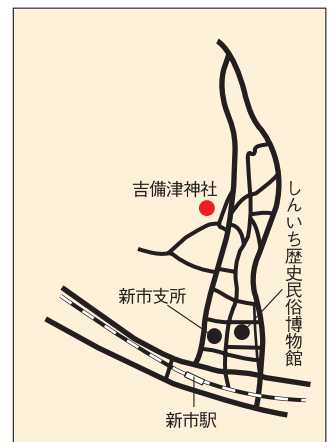


木造狛犬

その後、1648年に新築されたのが現在の本殿です。正面の柱の間が7間という入母屋造は県内最大で、国の重要文化財に指定されています。

ほかに、木造狛犬まきぞうま（東京国立博物館へ出展中）、毛抜型太刀が国重要文化財に、錫杖頭しゃくじょうとう、神楽殿が県重要文化財に指定されています。

（2003年8月号に掲載）



柏城跡

「応仁の乱」の舞台の一つ

新市町下安井には、「柏^{かしわ}」という集落があります。この集落を取り囲む城や館跡群を総称して「柏城跡」と呼んでいます。

1989年から1993年にかけて柏城跡の一部である「四五迫城跡(本城・北城・南城)」「大森城跡」の発掘調査が行われ、各遺跡からは15世紀後半から16世紀後半にかけての遺物が出土しました。遺跡は、標高238mの観音寺山を中心として東西1,200m、



柵があった痕跡(本城地区)

南北1,500mの範囲に、城跡が14カ所、居館跡と推定される平坦地が8カ所確認されています。

柏が史料にあらわれるのは、1471年です。『庄元資寄進状』や『渡辺先祖覚書』によると、京都を中心とした「応仁の乱」(1467~1477年)は地方にも広がり、柏周辺は、東西両軍の攻防の舞台となりました。

柏城跡には、北から野呂往還(尾根道)が入り、東から6本、西からも4本の道が城内に通じていて、交通の要衝にもなっていました。

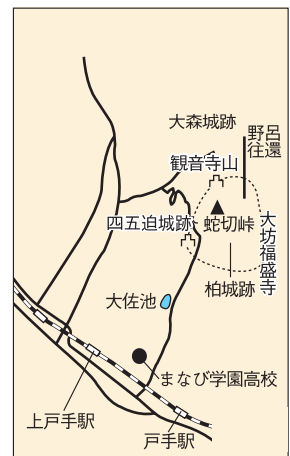
また、柏城跡の中心となる観音寺山には柏観音寺があり、地元では大坊福盛寺(駅家町新山)の奥の院と伝え



建物があった痕跡(北城地区)

られています。新山から柏の尾根伝いに城郭遺構が繋がっていることから、山岳寺院を取り込んだ城郭と見られます。

このように、柏は地理的にも、軍事的・宗教的にも重要な位置にあったといえます。観音寺山へは、戸手方面から大佐池を目標に北進し、蛇切峠から山道を北に登ってください。



(2003年10月号に掲載)

尾市第1号古墳とその周辺 多種多様な古墳が楽しめる

神谷川沿いの道を神谷川橋から北へ5kmさかのぼり、改修された波上橋を渡って北東に進むと芦浦谷と呼ばれる谷に入ります。「芦浦」は古い地名で、平安時代の『和名抄』に「葦浦郷」とその名が見られます。

谷の入り口付近の東側丘陵には、縄文時代から中世に至る各時期の遺物が出土した打部遺跡があります。198



尾市第1号古墳

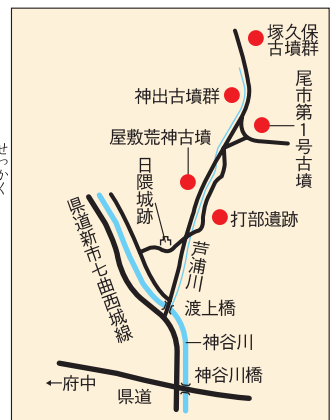
6年の発掘調査で、もみあとが付いた縄文晩期の土器片や、奈良時代を中心とした多量の須恵器が出土しています。谷の西側には、中世の日隅城跡があり公園になっています。

谷を流れる芦浦川に沿ってさかのぼると西側に屋敷荒神古墳があります。1988年に境内地造成中に発見され、発掘調査の後、横穴式石室が一部保存されています。さらに谷を進み、二またに分かれた道を右へ折れて山道を登ると、やがて尾市第1号古墳に至ります。

尾市第1号古墳は標高196mの尾根の先端にあり、3方向にほぼ同じ規



神出第1号古墳



模の石室（石櫓）が配置されています。入り口部分（羨道部）と合わせて平面が十字形の埋葬施設を持つ、全国的にも他に例を見ない7世紀後半の古墳です。使用されている石材は面を平らに整えた花こう岩で、くぼんだ部分や石材の継ぎ目には漆喰が残っています。また1984年の発掘調査によって多角形の墳丘であることが明らかになり、これも地方では貴重な例といえます。周囲には芦浦地域最大の横穴式石室が残る神出古墳群、標高250mの高所に築かれた塚久保古墳群などもあり、6世紀から7世紀に古墳が盛んに造られた地域といえます。

（2003年11月号に掲載）

金丸の文化財

山城と里山のむら

JR新市駅から北に向かつて6kmほど進むと新市町金丸地区で、吉備高原の最西南の里山を背にして南に開けています。金丸は、中世のころ「金丸名」と呼ばれ、地名から莊園や国衙領の名田として成立していたことがうかがえます。1339年に塔婆料所として足利尊氏から尾道浄土寺に寄進された記録が、史料上での初見です。「名」は小さな行政区域のことで、「名」の中には市場があり、今もその地名を残しています。



厚山宝篋印塔

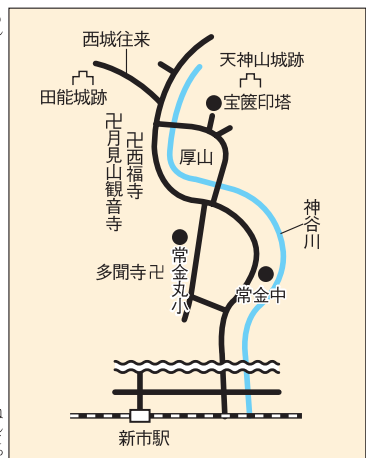
西の一面には田能城跡があり、最北の斜面には数本の豎堀がほぼ当時のまま残されています。備後の南北を結ぶ西城往来もふもとを通っており、交通路を取り込んだ城跡として貴重です。

田能城と向かい合った東の一面には天神山城がそびえ、南麓の上り口近くの厚山には十数基の五輪塔群とともに県重文の「宝篋印塔」3基が並んでいます。右端の塔には銘文があり、追善供養のため、1380年に建立されたことがわかります。

西福寺の西方にある月見山観音寺に、1700年ごろから伝わる市重文「当麻曼荼羅」は、古様を呈し、保存状態もよく、色彩も鮮やかで、ていねいに描きこんであります。公開はされていなので直接見学はできませんが、写真で見ることができます。また、多



月見山観音寺当麻曼荼羅



聞寺で毎年正月3日に行われる「念珠繰り」は、1759年以来、平安を願って続いています。

(2004年1月号に掲載)

藤尾の文化財①

水の信仰を今に伝える

福山市の最北西端に位置する新市町藤尾地区は、深い谷と急な山々に囲まれた里です。谷あいの父尾には、平安時代の『延喜式』に記された国高依彦神社と考えられる高竈神社があります。

また、父尾の集落より北には、下流から一の降、二の降、三の降と呼ばれる「藤尾の滝」があり、いずれも滝そ

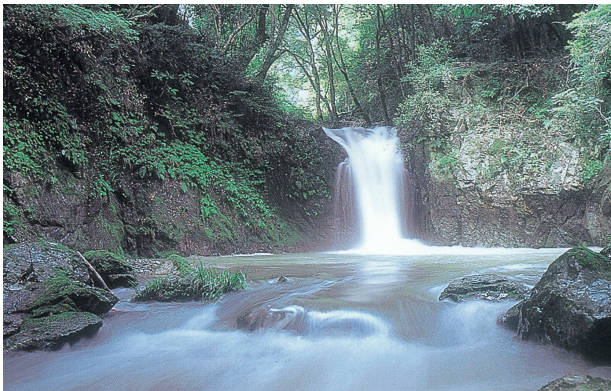


猿ガ城山

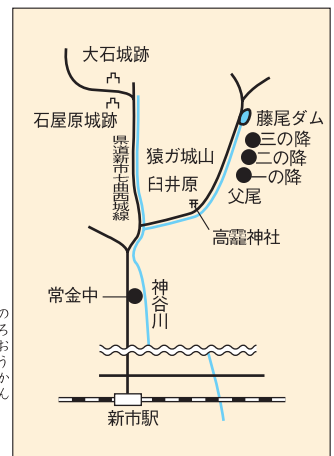
のものが現在でも「水の神」として祀られています。

中世には、父尾は銅の鉾山を中心として栄えていたと伝えられ「父尾千軒」という呼び方も残っています。近世の初めから林業と農業に転じていて、1907年ごろには、223戸・1,512人を最高に、減少の一途をたどり、2000年には27戸・70人と激減しています。

藤尾地区には神谷川の深い溪谷が入っているため、川底には街道はつく



藤尾の滝(三の降)



れず、峠越えや尾根道(野呂往還)が発達して、新市方面から東城・西城へのルートがいくつもありました。神石郡三和町(現在は神石高原町)との境には、石屋原城跡があり、神谷川をはさんで大石城跡と相對しています。金丸地区から藤尾地区にかけては、「サル」と呼ばれる崩れやすい地形や猿ガ城・白井原という地名、野生の猿・沢蟹・柿などの動植物が豊富なことから、新市版「さるかに合戦」の伝承もあります。

(2004年2月号に掲載)

戸手の文化財 旅人を見守った辻堂と道標

戸手地区には古代山陽道、江戸時代の石州道・府中往還など重要な交通路が東西に通っていました。

駅家町近田から戸手にさしかかる直前のゆるい登り坂で県道から分かれ、丘陵の間を通る道は堀越峠と呼ばれ、両側の丘陵には、かつて中世山城



▲上戸手四軒屋地蔵堂の道標



▶金比羅宮碑台石

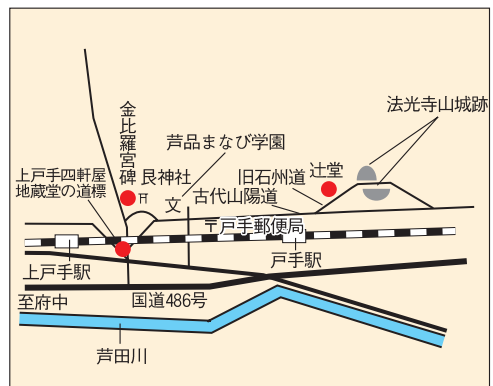
「法光寺山城」が、街道を押さえる形で築かれていました。峠を越えた道端には辻堂があり、周囲には地蔵がまつられています。

ここから西に15分ほど歩くと、右側に見えてくる上戸手良神社境内の金比羅宮碑の台石には、建物の礎石が使われています。周辺では古代の瓦が出土し、「慶徳寺」の地名が残っていたことから、古代寺院「慶徳廃寺」の名残と考えられています。

さらに福塩線の線路を越えて西に折れると上戸手四軒屋地蔵堂（辻堂）があり、ここが石州道と府中往還が出合



堀越峠の辻堂



う辻であったことがわかります。堂の棟札には、天和3（1683）年再興とあり、現在も地域の人々によって大切にされています。また、堂前に立っている道標には「右ふく山 左上方」と彫られています。

文化8（1811）年には伊能忠敬の測量方が戸手を訪れています。『信岡家文書』によると、戸手村で昼食をもてなした際の献立が残っており、鯛、くわいなどの料理が用意されました。

（2004年4月号に掲載）

相方の地名と地形

「沈下橋」を渡つたら

電車が新市駅に近づくころ、左手の山に相方城跡の石垣やテレビ中継塔が見え隠れします。この山から東南に伸びる山並みと、芦田川の右岸に沿った集落が相方です。地域内にある潮崎山古墳は、前方後円墳と推定される4世紀のもので、江戸時代中期に銅鏡1面と鉄斧1点が出土しています。

有地村の一部であったこの地が「相



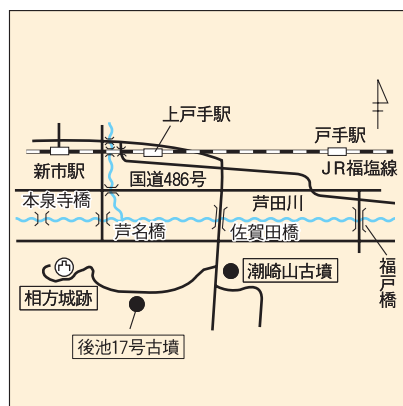
相方城跡から芦田川を望む

方」として記されたのは元禄12（1699）年の検地帳以降のことです。文化元（1804）年の『西備名区』は1カ所だけ「佐賀田」と記しています。国道486号から相方に通じる道は3カ所、戸手高校南の佐賀田橋、1km上流の芦品橋、そこから少し上手の本泉寺橋です。このうち本泉寺橋は、橋げたの流失を防ぐため、洪水のとき水中に没する「沈下橋」として作られています。沈下橋を持つ川は少なく、全国的にも珍しい例です。

城跡に上る道の半ばには復元された



沈下橋の本泉寺橋



「後池17号古墳」があり、直径7～8m、横穴式石室のある円墳です。

近くには後池1号古墳も見えます。

ほかにも団地造成時に縄文遺跡6カ所、弥生遺跡16カ所、古墳34カ所が確認されました。

頂上の城跡に立つと府中から神辺に至る家々、遠くは尾道・鴨方までの山容が望まれます。眺望の優れたことから古代は墳墓の地となり、戦国時代には栄華をめぐる拠点となりました。

（2004年5月号に掲載）

亀寿山

中世までは備後の中核だった

新市駅から北方向にバス道を横切ると、すぐに山麓に沿った道になります。亀寿山は標高約140mの二つの頂をもち、南西と北東方向から見ると、亀が東を向いているように見えることから「亀地山」とも呼ばれていたようです。

また、南東方向から見ると頂上が重



亀寿山城跡

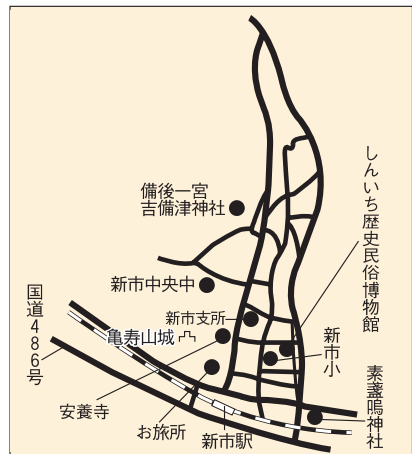
なり合って一つに見え、円すい形をした山容で、南の丘陵先端部には素盞鳴神社の「お旅所」があります。

亀寿山の中腹からは、古墳時代初頭の高坏（しんいち歴史民俗博物館で常設展示）が単独で出土していることから、古墳時代には亀寿山において「祭り」が行われていたものと考えられます。

室町時代には、山陽道と備後一宮（吉備津神社）を押さえていた宮一族の居城として、この地方の中心的な山城でした。江戸時代の初めに、初代福山藩の領主として着任した水野勝成は、神



亀寿山遺跡出土の高坏



辺城から「備後の新城」に拠点を移す際に、現在の福山城のある「常興寺山」、水呑沖の「箕島」とともに、この「亀寿山」を候補地にしたと伝えられています。

（2004年7月号に掲載）

一宮さんの狛犬

阿吽の呼吸で守ります

新市駅から北へ約2 kmほど進むと、通称「一宮さん」とよばれる備後一宮吉備津神社に到着します。鳥居をくぐりまっすぐ本殿へと進んでいくと赤い狛犬が目をひきます。備前焼の像としては大型で大変古く江戸中期の作と伝えられ、雌雄一对で本殿前を守っています。



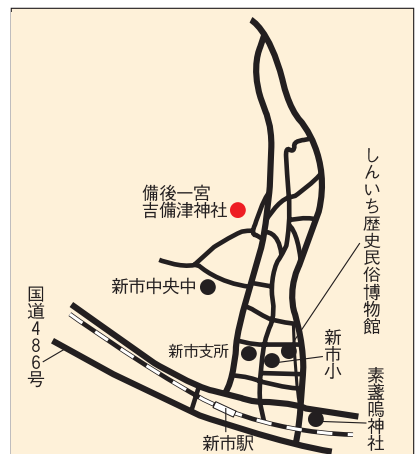
吉備津神社

一宮さんには、このほかに木造の狛犬3体があります。楠材の彫刻に漆下地、口を開けた阿形1体には金箔、口を閉じた吽形2体には銀箔が施されており、平安中期の作で藤原様式の大膽な彫刻が特徴です。平安時代には木製で、室内で使用されていましたが、江戸中期になり雨風をしのげる石や陶器製に変わり、雌雄一对で守護するようになりました。

狛犬のルーツはインドやエジプトなどの習俗から来たといわれ、例えばピラミッドを守護するスフィンクスなどがそうです。これが中国に伝わり、朝鮮半島を経由して日本に伝えられました。古くは開口で角のないものを「獅子」、



備前焼の狛犬(阿形)



閉口で角のあるものを「狛犬」と区別していましたが、獅子になじみのない日本では混同されて、高麗(こま)から来た「犬」とみなしたようです。一宮さんの木造狛犬は保存状態もよく国の重要文化財に指定され、2001年にはイギリスの大英博物館に展示されました。また、現在(2010年)東京国立博物館へ貸し出しています。

(2004年8月号に掲載)

網引公碑と至孝堂 備後版養老の滝伝説

神谷川橋から上流に進み、しばらくすると安楽寺橋が見えてきます。橋の南側の道路脇に、1991年に建て替えられた網引公碑と至孝堂跡の碑があります。



網引公金村の石碑

『続日本紀』に、神護景雲2(768)年2月、備後国鞆郡網引公金村(あひのみきみかなむら)の孝心をたたえ、「爵二級を賜ふ。その田租を復すこと終身」と書かれてお

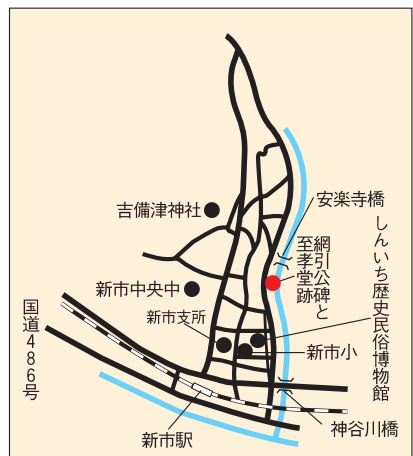
り、一生涯租税を免除されました。

金村は8歳の時に父が病に倒れ、父の代わりに農作業や山仕事をしていました。あるとき病の床にある父が酒を飲みたいと言いますが、そんなお金もなく、近くの山に木を切りに行き、山の水をくんで帰ったところ、その水が酒に変わったという金村の孝心をたたえ、ほうびをもらったというものです。

天保8(1837)年、宮内村庄屋の林吉助は、この孝心に感銘をうけて、神谷川右岸に顕彰碑を建立し、その隣に私塾至孝堂を設けました。この私塾には福山藩校教授の衣川閑齋もたびたび招かれて論語を説きました。網引公



至孝堂に使用された軒平瓦



碑の碑石の裏面には、彼の筆で網引公金村の孝心をたたえた文章が刻まれています。
至孝堂は1960年代ごろまでその姿をとどめていましたが、老朽化が激しく取り壊されました。

(2004年10月号に掲載)

里山の治水「かなな金名の郷頭」 権現古墳群への道

芦田川から神谷川沿いに約4km北上すると、左手に大きな工場が見えてきます。その塀に沿って西北に進むと、周囲の風景は棚田に変わります。

坂道を上っていく途中に2、3基の石碑があり、そのまま上れば金丸・府中線に至り、左手に小道を進むと「郷頭」と呼ばれる砂留に出ます。この小道は、かつては金丸から府中への主街



導水部より勢いよく流れる水

道でした。

この砂留は橋としても利用されており、長さが10m、幅は3mあります。

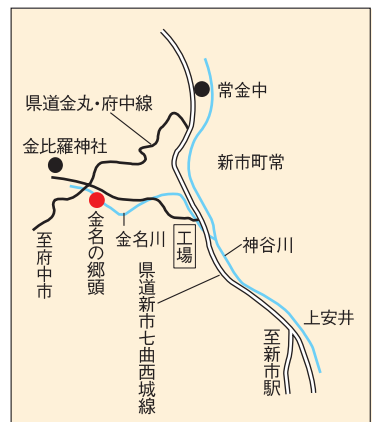
橋の上手は川底まで2mですが、下手は川底まで9mの高さがあり、アーチ型に組まれた石積みと、持ち送り工法で支えられた水門で構成されています。

崩れやすい急な斜面に囲まれたくぼ地の細々とした流れは、大雨ともなると、水門から大量の水を一気に吐き出します。畑地と山の崩落を防ぎ、地下水を確保するため、川底の石畳や巨岩を配列した護岸の石積みには、江戸時代の苦悩と知恵が込められています。

「こうと」は、川の上りや遊水池



石積みで作られた水門



につけられる地名で、「郷戸」「郷渡」と記され、宮内と新市の境にもあります。常には「郷藤」の地名があり、「こうとう」と伝えられたものと思われる。

小道を引き返し、坂道をさらに上ると金丸・府中線に出ます。さらに上って行くと金比羅神社があり、その辺り一帯が権現古墳群です。

上ってきた里山の地は、古代から近世の景観をよく保っています。

(2004年11月号に掲載)